
片目の樵
坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片目の樵

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

狸が片目の樵に化けたがばれてしまった、それはどうしてかという。古い逸話を小説にさせてもらった作品です。

第一章

片目の樵

加賀の話である、室町の八代將軍義政の頃であると言われている。この国のある村で樵を生業としている男がいた、名前も左吉といった。

左吉は子供の頃に病で右目を失いその時から片目で生きている、片目だが大柄で力も強くいつも多くの薪を手に入れて村人達に売っていた。

それで今日も仲間達と共に山に入りに行ったがこの時女房のお福に言った。

「今日は山に籠ってな」

「そうしてだね」

「薪をうんと取って来るからな」

だからだとだ、小さな目とふっくらとした顔の色白の女房に言った。見れば身体の肉付きもかなりいい。

「明日の夕方に帰るからな」

「今日はいないからだね」

「留守を頼むぜ」

「わかったよ、じゃあ帰ったらね」

お福は仕事に行く亭主ににこにことして話した。

「お酒を用意しておくからね」

「酒か」

酒好きの左吉はそう聞いて思わず笑顔になった。

「それじゃあな」

「帰った時を楽しみにして働いてくるんだよ」

「そうしてくるな」

左吉はお福に笑顔で応えてだった。

仲間達と一緒に意気揚々と山の中に入った、そして山の中で仕事に励み夕方山の中にある樵達が休む為に作った山小屋に入って仲間達に話した。

「帰った時が楽しみだ」

「ああ、お福さんがだよな」

「酒を用意してくれてるんだな」

「そうなんだな」

「酒があるとな」

酒好き故に仲間達に話した、晩飯の川魚を焼いたものを食べつつ述べた。

「わしはそれだけで違う」

「あんた酒好きだからな」

「それじゃあだな」

「今日は飯食ったら寝て」

「それで明日も働いて」

「そうしてだな」

「ああ、帰ったらたらふく飲むぞ」

仲間達と山小屋の中で話した、この時左吉は笑顔で話していた。人気がない山の中なので誰も聞いているとは思っていなかった。

だがそれでもだ、山小屋の外でだった。

彼等の話を聞いている者達がいた、それは狸達だった。

彼等は樵達の話聞いて彼等の中で話した。

「成程な」

「明日も働くんだな」

「精が出るな」

「今日で帰るかと思ったら」
「明日もなんだな」
「そうだな、しかしな」
「ここで狸のうちの一匹である権吉が言った。
「片目の樵の旦那が言ってたな」
「ああ、明日帰ったら酒飲むってな」
「かみさんが用意してくれた」
「それ飲むって言ってるな」
「そうだな」
「旦那達の村とどの家かもわかってるしな」
権吉は笑って言った。
「ここはちよっとな」
「どうするんだ？」
「何かするつもりか？」
「どうするんだ？」
「いや、酒を頂戴するか」
「こう言うのだった。」
「そうするか」
「酒？」
「酒をか」
「それをか」
「ああ、あの旦那の家に今から行ってな」
「そうしてというのだ。」

第二章

「あの旦那は片目だから化けやすいしな」

「そうするか」

「それはまた大胆なことをやるな」

「しかし面白いな」

「やってみろ」

「それで酒を頂戴してみろ」

「そうするな」

仲間達に言ってだった。

権吉は左吉に化けた、片目であるところもちゃんとした。そうして村に行って彼の家に入って言った。その時はもう夜だった。

「帰ったぜ」

「あれっ、あんた」

お福は家に帰った亭主を見てだった。

すぐに眉を顰めさせた、だがそれをすぐに隠して聞き返した。

「帰るのは明日じゃないかい？」

「変わったんだ」

薪を出しつつこう返した。

「急にな」

「そうなのかい」

「他の奴は明日帰って来る、わしは今日帰ってまた山に入る」

「そうするんだね」

「ああ、だからな」

「今日は家で休むんだね」

「そうする、酒だ」

彼は目当てのその話をした。

「出してくれ」

「酒だね」

「そうだ、あるんだよな」

「あるよ」

女房は亭主を見つつ応えた。

「それじゃあだね」

「ああ、出してくれ」

「そうさせてもらうね」

お福はすぐに酒を出した、そしてだった。

権吉、左吉に化けた彼は目当ての酒をたらふく飲んだ。左吉にとつては少しだったが権吉にとってはそれだけの量で。

彼はすぐに酔い潰れてしまった、それから。

目覚めるとだ、彼は動けなくなっていた。気付くとだった。

家の柱のところに座らせられていてそのうえで両手を後ろにやって括りつけられていた、それで彼は驚いて言った。

「これはどういうことだ」

「どういうこともじゃねえ」

すぐにだった、男の声が出た。声の方を見ると。

左吉がいた、彼は酒を飲みつつ権吉に言った。

「わしに化けるとはいいい度胸だ」

「あんたは樵の旦那か」

「そうだ、帰ったらお前さんがそうしてだ」

「あたしが括り付けたんだよ」

左吉の横にいるお福も言ってきた。

「どうせ旦那の話を山で聞いて酒を飲もうって来たんだろ」

「よくわかるな」

「やっぱりそうなんだね」

「わしは狸だ」

権吉は自分からこのことを言った。

「権吉と言う」

「狐か狸かと思ったがな」

「狸だ」

こう左吉に答えた。

「半分当たったな」

「そうだな、しかし何でわしが化けているとわかった」

左吉は二人にこのことを問うた。

第三章

「化けるのには自信があるんだぞ」

「いや、わかるだろ」

「全くだよ」

夫婦で左吉に返した。

「あたしがわからないと思ってるのかね」

「こんなのわしを知ってると一目瞭然だ」

「それがどうしてかわからないんだ」

左吉は怒って言った。

「わしはちゃんと旦那が片目なのまで化けたんだよ」

「その片目だ」

左吉は飲みつつ言った、帰ってから飲んでいる待望の酒は実に美味い。

「わしが片目なのをよく見た」

「だから化けやすいと思ったんだが」

「わしは右目だ」

その見えない目はというのだ。

「右目が駄目なんだぞ」

「?どういうことだ」

「お前さんは左目がそうなっているぞ」

逆の方がというのだ。

「だったらな」

「逆か」

「それでわからない筈があるか」

「あたしはこの人と一緒に暮らしてるんだよ」

お福もまた言ってきた。

「だったらだよ」

「すぐにわかるか」

「そうだよ、迂闊だってね」

「確かに迂闊、片目だけ見ては駄目だった」

「そういうことだ、しかしな」

左吉は自分の失態に気付いて苦い顔になった権吉に言った。

「わしに化けて酒を飲もうとした」

「そのことについてか」

「どう落とし前をつけるか」

「このことを言うのだった。」

「聞かせてもらうか」

「こうなっては仕方がない」

苦い顔のままです、権吉は左吉に答えた。

そしてだ、出ると言って自分の前に銭を多く出して言った。

「本物だ、これを酒代と化けて騙した詫びにしているか」

「それだけあったらな」

「いいよ」

左吉だけでなくお福もよしとした。

「これが何もなしだったら袋叩きにしていたよ」

「狸鍋はしないがな」

「じゃあそれでね」

「縄をほどいてやるからとっとと帰れ」

「そうさせてもらう、しかし片目といっても右と左を間違えろとな」

彼は権吉は苦い顔でこうも言った。

「それだけで駄目だな」

「間拔けな話だな」

「全くだ、化けるにしても考えんな」

この言葉も苦い顔で言ってだった。

縄をほどいてもらった権吉はすたこらと逃げ出した、以後彼はそうした悪戯をしなくなりかつ化ける相手のことをこれまで以上に見ることにした。加賀今の石川県に伝わる古い話である。

片目の樵 完

2021・7・11

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~26681

片目の樵

2022年01月30日 23時25分発行